

## 経験の現象的特徴の自然化について

### —ドレッキの表象説の批判的検討—

新川 拓哉

はじめに

現代の知覚の哲学においては、経験の現象的特徴(phenomenal character)の分析をめぐって、さまざまな立場が論争を繰り返している。その分析における論点のひとつに、経験の現象的特徴は自然化されるか、つまり、経験の現象的特徴は自然主義的な枠組みに位置づけられるか、というものがある。知覚経験<sup>1</sup>の表象説(以下、表象説とする)は、経験の現象的特徴の自然化を試みる有力な立場の一つである。表象説は、自然主義的な枠組みで扱うことができるとみなされている表象という道具立てを用いて、経験の現象的特徴の分析を試みる立場である。もし経験の現象的特徴が表象的な語り方によって分析されるのであれば、経験の現象的特徴を自然化する道筋が見えてくることであろう。しかし、表象という道具立てを用いた経験の現象的特徴の分析は、どれほどうまくいっているのだろうか。また、うまくいく見込みはどれほどあるのだろうか。本稿は、それらの問いに対する貢献を目指すものである。

本稿の目的は、経験の現象的特徴の自然主義的な枠組みへの位置づけが成功しているかどうかの基準を提案したうえで、実際にフレッド・ドレッキの表象説に対してその基準を用いた評価を行うことである。それゆえ、本稿における議論の射程は、表象説一般ではなく、ドレッキの表象説に限られることになる。ドレッキの表象説を取り上げる理由は、彼の議論においては、表象という道具立てによって経験の現象的特徴がどのように自然化されるのか、という要点が明瞭だということにある。

本稿における各章の構成は以下ようになる。一章では、経験の現象的特徴がどのようなものであるかを明示したうえで、経験の現象的特徴の自然主義的

な分析に対する評価基準を二つ提示する。二章では、ドレツキの表象説の基本的な枠組みについて要約したうえで、その説における経験の現象的特徴の分析を評価するポイントがどこにあるかを示す。三章では、ドレツキの表象説による経験の現象的特徴の分析について、二章で示したポイントと、一章で提示した二つの基準を照らし合わせることによって、評価する。

## 1 知覚経験の現象的特徴

### 1.1 経験の現象的特徴とはどのようなものか

経験を他の心的状態<sup>2</sup>(信念や欲求など)と区別する大きなポイントの一つは、経験が現象的特徴を持つということである。それゆえ、経験の現象的特徴は、知覚経験を分析するにあたって主題的に取り上げる必要があると言えるだろう。だが、経験の現象的特徴とはいったいどのようなものなのであろうか。

一般的に、経験の現象的特徴には、「ある主体がその経験を持つことがまさにそのようなことであるもの(what it is like for the subject to have it[the experience])」<sup>3</sup>という定式化が与えられることが多い<sup>4</sup>。この定式化からは、経験の現象的特徴が、ある経験を持つ主体の観点から捉えられるものだということがわかる。だが、この定式化には曖昧なところがある。というのも、その定式化からは、経験の現象的特徴について、それが経験そのものの特徴であるのか、経験においてそれに気づく(aware of)特徴(しばしば「現前的特徴(presentational character)」と呼ばれる)であるのかという点が明らかではないからである<sup>5</sup>。

「ある主体がその経験を持つことがまさにそのようなことであるもの」とはどのようなものであるかをもう少し詳細に特徴づけるために、私がなんらかの知覚経験を持っている場面を考えよう。私はいま目の前の本棚を見ている。そこで、私に対してさまざまな事物やその性質が現前している。たとえば、さまざまな色の背表紙の本や妙に歪んだ置物などがそこここに立ち現れている。そして、もし私からそれらの現前するものを奪い去ったならば、私の経験に何かが残るとは思えないのである。それゆえ、その経験を持つ主体の観点から捉えたとき、経験を成立させているのは、さまざまなものの現前であると考えられる。

また、それらの現前するもののあり方が変化することは、すなわち私の経験が変化することに他ならないように思われる。それゆえ、私にとって、ある経験をその経験たらしめているのは、現前するもののあり方であると考えられるのである。以上のことから、経験を持つ主体の観点から捉えたときの経験の本質的な構成要素は、現前するものであると言えるだろう<sup>6</sup>。

それゆえ、「ある主体がその経験を持つことがまさにそのようなことであるもの」は、現前するもののあり方によって構成的に決定されることになる。そうだとすれば、経験の現象的特徴を、現前するもののあり方と同一視することは妥当であろう。以上のことから、私は経験の現象的特徴を、経験の特徴ではなく、現前の特徴としてみなすことが妥当であると結論づける。

## 1.2 経験の現象的特徴の自然化

さて、ここで、ある心的状態について、その心的状態にある主体の観点から捉える仕方を「一人称的」と呼ぶことにする。また、ある心的状態について、その心的状態にあるものを観察対象とする観点から捉える仕方を、「三人称的」と呼ぶことにする<sup>7</sup>。

以上の区別によると、経験の現象的特徴とは、経験について一人称的な観点から捉えたときに見出される特徴であると言えるだろう。少なくとも、経験の現象的特徴という概念を理解するためには、一人称的な観点が不可欠であると考えられるのである。

一見すると、三人称的な観点からは、経験の現象的特徴を見出すことができないように思われる。たとえば、コウモリに関する生理学的な構造がどれほど明らかになったとしても、コウモリが超音波によって対象を知覚する場合に、コウモリにとってその知覚経験を持つことがどのようなことであるのかについて、私たちはまったく理解していないように思えるのである。事態は、人間に関しても同様である。というのも、私たちが人間について、彼らがなんらかの知覚経験を持っているときの、脳を含む知覚プロセスの構造や機能などを生理学的にどれほど詳細に明らかにしたとしても、人間にとってその知覚経験を持つことがどのようなことであるのかについての理解は得られないように思える

からである。このことは、経験の現象的特徴が三人称的な枠組みから断絶しているということを示すのではないだろうか。

だが、多くの論者がそのような断絶を乗り越えようと試みてきた。つまり、三人称的な観点から経験の現象的特徴を分析しようとする多くの試みが為されてきた<sup>8</sup>。たとえば、ドレッキはいくつかの著作<sup>9</sup>で、現象的经验の表象说的説明を試みているが、それはまさに、三人称的な観点からの経験の現象的特徴の分析であるといえよう。先に述べたように、経験の現象的特徴という概念を理解するためには、一人称的な観点が不可欠である。それを踏まえると、ここでのポイントは、一人称的な観点と結び付いた経験の現象的特徴という概念を、三人称的な枠組みに十全に位置づけることができるかどうかということである。そして私は、そのような位置づけこそが「経験の現象的特徴の自然化」によって意味されていることだと考えている。

経験の現象的特徴の三人称的な枠組みへの位置づけが可能であるためには、経験の現象的特徴と三人称的な枠組みの間に、何らかの接点が必要ならぬ。私は、可能な接点は、経験の現象的特徴が思考や知識や行為に対して担う機能や役割であると考えている。機能や役割という概念は三人称的に理解可能であるがゆえに、それらは経験の現象的特徴と三人称的な枠組みの間の共通項でありうる。そして、それらが共通項を持つということが、それらの間の関係を見出す可能性を開くのである。それゆえ、まず私たちは、経験の現象的特徴がどのような機能や役割を持つかを見出さなくてはならない。その後こそ、経験の現象的特徴の三人称的な枠組みへの位置づけの方向性が見えてくるのである。

これはすなわち、経験の現象的特徴が果たすべき機能や役割を、三人称的な観点から経験の現象的特徴を分析する理論がうまく説明できているかどうか、その理論を評価するポイントとなるということでもある。経験の現象的特徴が果たす機能や役割は数多くあるかもしれない。本稿の目的にとっては、経験についての三人称的な理論の評価のために利用しやすい機能や役割を抽出することが重要である。そのことを踏まえたうえで、次節では、経験の現象的特徴の二つの役割を提示する。

### 1.3 経験の現象的特徴の二つの役割

経験の現象的特徴が果たす機能や役割を考察する際には、経験の現象的特徴が一人称的に捉えられる概念であるがゆえに、一人称的な観点から捉えた経験と思考や知識や行為との結び付きに注目する必要がある。私が本稿で強調したい経験の現象的特徴の役割は二つある。その一つは、ジョン・キャンベルが「経験の説明的役割」<sup>10</sup>と呼ぶものである。キャンベルによれば、経験の説明的役割とは以下のような原理である。

経験の説明的役割の原理：個別的な物理的対象の概念や、そのような対象の観察可能な特性の概念は、世界についての私たちの経験によって利用可能になる<sup>11</sup>

一見すると、経験の説明的役割と経験の現象的特徴の関連は明白ではない。それを明白にするためには、その原理における「経験」を一人称的に捉えなおす必要がある<sup>12</sup>。「経験」を一人称的に捉えたならば、経験の説明的役割は、「個別的な物理的対象の概念や、そのような対象の観察可能な特性の概念は、何かが現前することによって利用可能になる」という原理として解釈できる。このとき、現前するものがそのような概念獲得のために役立っている、と考えることは妥当であろう。それゆえ、このように解釈された経験の説明的役割は、経験の現象的特徴のひとつの役割を述べたものだと言えるだろう。

では、経験の説明的役割は、経験の現象的特徴の三人称的な位置づけを評価するための道具として、適切に働きうるのだろうか。以下では、それが適切に機能しうるということを示そう。

経験の現象的特徴の三人称的な枠組みへの位置づけを試みる立場のうちには、経験の現象的特徴を単にエピソード的なもの、つまり、あってもなくても機能的には何も変わらないもの、とみなす立場がある<sup>13</sup>。だが、もしもそれらがエピソード的なものにすぎないのだとするならば、それが定義からして機能を持たないがゆえに、現前するものが概念形成のための役割を担うということが理解不可能になってしまう。したがって、経験の説明的役割を認めるな

らば、現前するものがエピフェノメナルなものだということ否定することになるのである。以上のように、経験の説明的役割の原理は、経験の現象的特徴の三人称的な位置づけに対する、つまり現前するものの三人称的な特徴づけに対する、制約となりうるのである。

ここまでの議論から、経験の現象的特徴の三人称的な位置づけを考える際に、経験の説明的役割の原理がひとつの評価基準となりうる、ということ結論できるだろう。さて、先に述べたように、本稿で取り上げる経験の現象的特徴の役割は二つある。以下では、もう一つの経験の現象的特徴の役割について述べよう。私はその役割を、「経験の認識論的役割」と呼ぶ。

経験の認識論的役割の原理：個別的な物理的対象やそのような対象の観察可能な特性からなる世界のあり方についての知識は、私たちの経験によって獲得される

この原理は、このままでは、知識に対する経験の常識的な寄与を表現するものに過ぎない。だが、その原理における「経験」を一人称的な観点から捉えるならば、経験の認識論的役割は、「世界のあり方についての知識は、何かが現前することによって獲得される」という原理となる。このとき、この原理のもっとも自然な解釈は、「現前するもののあり方によって、世界のあり方についての知識を得ている」というものである。だとすれば、この原理が、現前するものをエピフェノメナルなものとみなす立場を排除するというのは明白である。それゆえ、この原理も、現前するものの本性に対する捉え方に制約を与えるものとなりうる。経験の認識論的役割も、それを一人称的な観点から捉えるならば、経験の現象的特徴の三人称的な位置づけに対する評価基準として機能しうるのである。

本節では、経験の現象的特徴が持つ役割として、経験の説明的役割と経験の認識論的役割という二つの役割を提案した。私は、これらの原理は常識的に認められるべきものだと考えているし、それを前提して議論を進めていく。だがもちろん、これらの原理に対する反論も可能であろう。考えうる反論のすべてを取り扱うことはできないが、その一部については、第三章で取り上げること

にする。

#### 1.4 一章のまとめ

一章で行なった議論は以下のようなものである。まず、経験の現象的特徴について、一人称的な観点から経験を捉えたときの、経験において現前するもののあり方としてみなすべきだと論じた(1.1)。次に、経験の現象的特徴の三人称的な位置づけを行なう際には、経験の現象的特徴の機能や役割を考慮に入れる必要があると述べた(1.2)。その上で、経験の現象的特徴の三人称的な位置づけを評価するための二つの原理を提示した(1.3)<sup>14</sup>。次章では、ドレッキの表象説がいかなる立場なのかについて詳しく論じていく。

## 2 ドレッキの表象説

本章の目的は、ドレッキの表象説における経験の現象的特徴の分析を評価するために、評価の際のポイントとなるドレッキの理論の特徴を際立たせることである。ただし、そのための準備作業として、表象説がいかなる立場であるのかを明白にすることと、ドレッキの表象説の基本的な枠組みを明示することが必要であると思われる。それゆえ、以下では、まず表象説がいかなる立場であるのかについて明白にする(2.1)。次に、ドレッキの表象説の基本的な枠組みについて要約する(2.2)。その上で、ドレッキの表象説を評価する際のポイントを明らかにする(2.3)。

### 2.1 表象説とはいかなる立場か

表象説について論じるにあたって注意しなければならないことは、「表象説」という語が、ある弱い主張を意味していることもあれば、別の強い主張を意味していることもあるということである。それゆえ、表象説に明白な定式化を与えないまま議論を進めると、誤解や混乱を生む可能性がある。本節の目的は、そのような混乱を避けるために表象説に明白な定式化を与えようとして、ドレッ

キが表象説を採用しているということを確認することである。

まず私は、表象説が意味する二つの主張を区別するために、ウィリアム・フィッシュの用語法<sup>15</sup>に従って、弱い主張に対して「志向説」というラベルを張り、強い主張に対して「表象説」というラベルを貼ることにする。以下では、志向説と表象説がそれぞれどのような立場であるかを見ていこう。

フィッシュによると、「すべての知覚経験は表象的である」<sup>16</sup>という原理を認める立場が志向説とみなされる。ここでの「表象的である」は「表象内容を持つ」と言い換えることができるので、志向説とは、「すべての知覚経験は表象内容を持つ」という原理を支持する立場を意味することになる。なお、表象内容とは、世界のあり方を表すものであり、実際の世界のあり方に対して正しかったり正しくなかったりするものである。たとえば、「私の目の前にリンゴがある」という表象内容は、私の目の前にリンゴがあるという事態を表しており、その表象内容が正しいときには、実際に私の目の前にリンゴがあり、正しくないときには、私の目の前にリンゴはないということになる<sup>17</sup>。

一見して明らかであるように、志向説は、経験の現象的特徴の分析について積極的なコミットメントを含んでいない。他方で、表象説とは、現象的特徴の分析についてのある特定のコミットメントを、志向説に付け加えた立場とみなすことができる。それゆえ、表象説は志向説よりもより強い主張なのである。では、表象説とは、志向説にいかなる原理を付け加えた立場であるのか。

一般的には、表象説は、すべての知覚経験について、「経験の現象的特徴はその経験の表象内容にスーパーヴィーン<sup>18</sup>する」と考える立場とみなされている<sup>19</sup>。この原理は、確かに、経験の現象的特徴の分析についての特定のコミットメントを表現していると言えるだろう<sup>20</sup>。

さて、私はこれまでにドレッキが表象説を採っているということを前提してきたが、ドレッキは志向説のみならず表象説を採用していると言うことができるのだろうか。ここでそれを確認しておこう。ドレッキは、「経験の現象的特徴—その経験を持つことがどのようなことであるかを決定する質—は、事物がある性質を持っている、と経験が表象するときの、その性質によって完全に与えられる」<sup>21</sup>と主張している。ドレッキの理論枠組みでは、経験の表象内容は表象される性質によって構成されると考えられている<sup>22</sup>、ということ踏まえる



と、そのテーゼはスーパーヴィーニエンスによる定式化に適合すると言えるだろう。それゆえ、ドレッキは表象説を採っていると言えるのである。

ここで改めて、志向説と表象説がそれぞれいかなる立場であるかを明示しておこう。

知覚経験の志向説：すべての知覚経験は表象内容を持つ

知覚経験の表象説：知覚経験の現象的特徴はその経験の表象内容にスーパーヴィーンする

本節では、表象説と志向説がそれぞれどのような立場であるのかを確認したのち、ドレッキが表象説を採用しているということを示した。次節では、ドレッキの表象説の基本的な枠組みについて詳しく見ていく。

## 2.2 ドレッキの表象説の基本的な枠組み

ドレッキの表象説を理解するための鍵となるのは、自然主義的な表象概念である。まずは、ドレッキが「 $X$ が $Y$ を表象する」ことをどのように理解していたのかを確認しよう。ドレッキは以下のように定義する<sup>23</sup>。

あるシステム  $S$  が性質  $F$  を表象するのは、 $S$  がある特定の対象領域の  $F$  を表示する ( $F$  についての情報を与える) 機能を持つとき、そしてそのときのみである。 $S$  は (その機能を果たすときには)、 $F$  のそれぞれ異なる確定した値  $f_1, f_2, \dots, f_n$  に対応して、それぞれ異なる状態  $s_1, s_2, \dots, s_n$  を占めることによって、その機能を果たす。

たとえば、体重計は、それに乗っている対象の重さを表示する機能を持つ。そして、体重計は、それに乗っている対象の重さに対応して、ある状態を占めること (たとえば、しかじかの位置に針が振れること) によって、その機能を果たす。それゆえ、体重計は対象の重さを表象すると言えるのである。そのとき、仮にその対象が 40 キログラムだったとすれば、その体重計の表象内容は、「そ

の対象は40キログラムである」というものとなる<sup>24</sup>。

ドレッツキ流の表象概念は、情報と機能という三人称的に把握できる概念によって定義されるものである。このような表象概念は、古典的な表象概念、つまり世界と主体の間のインターフェースとしての表象概念とはまったく別のものである。古典的な表象概念においては、「XがYを表象する」という表象関係は、イメージや観念のような心的な存在者と、世界に実在する事物との間に成立するものとみなされていた<sup>25</sup>。それに対して、ドレッツキ流の表象概念は、表象関係を、物的な事物の間に成立するものとして捉えるのである。

では、ドレッツキの枠組みにおいては、経験と表象概念はどのように結び付けられているのか。ドレッツキによると、経験における表象媒体は脳状態であるが、経験の表象内容が頭のなかにあるわけではない<sup>26</sup>。ここで重要なことは、表象媒体と表象内容の区別である。「XがYを表象する」という表現に即していえば、Xが表象媒体であり、YについてXが表示しているものが表象内容である。それゆえ、経験の媒体である脳状態(すなわちX)が、それが表示する機能を持つもの(すなわちY)について表示しているものが、経験の表象内容なのである。

では、経験における表象媒体である脳状態は、何についての情報を表示する機能を持っているのか。一般的に、表象媒体は、規約的ないしは進化的に世界の他の部分とある関係に立つことによって、表示機能を得る<sup>27</sup>。たとえば、文の場合は、私たちが言語に付与したある種の社会的規約によって表示機能を得るのであり、脳状態の場合は、脳を含めた私たちの知覚システムの環境との進化論的相互作用によって表示機能を得るのである。ドレッツキによると、経験における表象媒体である脳状態とは、「連続的と言えるような質(表面反射率、速度、方向、周波数など)にかんする情報を担う機能を持つ」<sup>28</sup>表象システムの状態である。つまり、経験における表象媒体である脳状態は、世界のなかで例化されているさまざまな性質についての情報を表示するという機能を持っているのである。

ここまでの論述から、ドレッツキの表象説においては、経験における表象媒体は脳状態であり、表象内容は世界のなかで例化されているものとして表象されている性質であるということが明らかになった。先に述べたように、ドレッツキは、「経験の現象的特徴—その経験を持つことがどのようなことであるかを決定

する質—は、事物がある性質を持っている、と経験が表象するときの、その性質によって完全に与えられる」<sup>29</sup>と主張している。これはつまり、脳状態が事物によって例化されているものとして表象する性質によって、経験の現象的特徴が決まるということである<sup>30</sup>。

ドレッキの表象説においては、経験の現象的特徴は三人称的な枠組みに位置づけられていると言えるだろう。なぜなら、ドレッキの表象説では、経験の現象的特徴は、三人称的な枠組みにおける概念(情報、機能、性質など)によって記述可能だとみなされているからである。

さて、本節では、ドレッキの表象説の基本的な枠組みを確認してきた。次節では、ドレッキの表象説のどのような点が、経験の現象的特徴の分析を評価する際に問題となるのかを明らかにする。

### 2.3 ドレッキの表象説における二つのポイント

本節では、ドレッキによる経験の現象的特徴の分析を評価する際に問題となる、二つの論点をそれぞれ確認していく。まずは一つ目のポイントについて述べよう。前節で、ドレッキの表象説においては、経験の表象内容は世界のなかで例化されているものとして表象された性質によって構成される、ということが明らかになった。だが、その表象内容には、そのような性質を例化している実在する個物そのものは含まれないのだろうか。ドレッキは、以下のように述べる。

内容について語るときには、私たちは常に属性的な内容、つまり、ひょっとすると存在しないかもしれない対象について表象が述べる(表象する)もの、を意味していると理解されなくてはならない。…知覚的表象の内容は対象を含むものではないのである。<sup>31</sup>

私たちの経験の現象的特徴は、私たちが経験する対象によってではなく—経験が、主観的に、正確に同じ種類の経験のままである一方で、それらの対象は変化したり存在しなくなったりし得る—、経験が事物はそのように

あると表象するあり方によって、つまり、経験が、対象が(もし存在するとしたら)持っている表象する性質によって決定されるのである。<sup>32</sup>

ドレッキによれば、経験の表象内容に個物は含まれず、それゆえ個物は経験の現象的特徴を決定する要素とみなされないことになる<sup>33</sup>。それゆえ、ドレッキの表象説は以下のテーゼを含んでいる。

テーゼ A : 個物は経験の現象的特徴の構成要素ではない<sup>34</sup>

次に、第二の論点を提示しよう。ドレッキは知覚対象についての標準的な因果理論を採用する<sup>35</sup>。そのような因果理論によれば、私たちが何を知覚しているのかは、どの個物が私たちとしかるべき因果関係にあるかによって決まるのである。それゆえ、私たちが知覚している個物が例化する性質は、私たちと適切な因果関係にある個物がどのような性質を例化しているかによって決まるのである<sup>36</sup>。このことと、前節で述べた経験の表象説的な説明を比較するならば、そもそも私たちが何らかの個物を知覚しているかどうかを決定する基準(適切な因果関係の有無)と、私たちが知覚している個物がどのような性質を例化しているのかを決定する基準は、それぞれ、何らかの経験が成立しているかどうかを決定する基準(脳状態がある種の性質を適切な仕方表象しているかどうか)や、その知覚経験の現象的特徴がどのようなものであるかを決定する基準と異なっているということがわかる。そして、基準におけるその違いは、経験の現象的特徴のあり方と、世界のあり方が乖離する原因となるのである。

確かに、真正な知覚経験の場合には、知覚される個物が例化している性質と、経験の現象的特徴を構成する性質は一致すると考えられる。つまり、経験の現象的特徴のあり方と世界のあり方は一致する。だが、幻覚経験や錯覚経験の場合にはどうであろうか。幻覚経験の場合には、標準的な知覚の因果理論に従うと、私たちが何も知覚していないことになる。だが、その経験は何らかの性質によって構成された現象的特徴を持っている。錯覚経験の場合には、私たちが知覚している個物が例化している性質と、その経験が持つ現象的特徴を構成する性質が、異なっていることになる。そのような場合、経験の現象的特徴のあ

り方と世界のあり方は一致していないことになる。

幻覚や錯覚の事例を考慮すると、経験の現象的特徴のあり方と、経験主体の周囲の世界のあり方が一致しない可能性があるということになる。それゆえ、ドレツキの表象説は以下のテーゼを含む。

テーゼ B：経験の現象的特性のあり方が世界のあり方と一致しない可能性を許容する

ここで挙げた二つのテーゼが、ドレツキの表象説における経験の現象的特徴の位置づけを評価するための軸となるのである。

## 2.4 二章のまとめ

二章で行なった議論は次のようなものである。まず、表象説と志向説を区別したうえで、ドレツキが表象説を採っているということを確認めた(2.1)。次に、ドレツキの表象説の基本的な枠組みを確認したうえで、ドレツキの表象説が経験の現象的特徴を三人称的な枠組みのうちに位置づけているということを示した(2.2)。そして、ドレツキの表象説を評価する際に問題となる二つのポイントを提示した(2.3)。三章では、一章で提示した経験の現象的特徴の二つの役割と、二章で述べたドレツキの表象説における二つのテーゼを対照させることから、ドレツキの表象説における経験の現象的特徴の位置づけについて考察する。

## 3 ドレツキの表象説を評価する

前章では、ドレツキの表象説を評価する際に焦点を当てる二つのポイントを提示した。

テーゼ A：個物は経験の現象的特徴の構成要素ではない

テーゼ B：経験の現象的特性のあり方が世界のあり方と一致しない可能性を許容する

また、第一章で述べたように、経験の現象的特徴の三人称的な位置づけを評価する際に、私が取り上げるのは「経験の説明的役割の原理」と、「経験の認識論的役割の原理」である。

経験の説明的役割の原理：個別的な物理的対象の概念や、そのような対象の観察可能な特性の概念は、世界についての私たちの経験によって利用可能になる

経験の認識論的役割の原理：個別的な物理的対象やそのような対象の観察可能な特性からなる世界のあり方についての知識は、私たちの経験によって獲得される

さて、ドレツキの表象説による経験の現象的特徴の位置づけは、どれほどうまくいっているのであろうか。以下の議論は、テーゼ A を経験の説明的役割と対照させ、テーゼ B を経験の認識論的役割と対照させるという方針で進めていくことにする。

### 3.1 経験の説明的役割からの議論

まずは、テーゼ A と経験の説明的役割の原理との整合性について論じていこう。一章で明らかにしたように、経験の現象的特徴とは経験において現前するもののあり方であった。それゆえ、テーゼ A から、ドレツキの表象説においては、個物は現前するもののあり方の構成要素ではない、ということが帰結する。しかし、一人称的な観点からは、本やコーヒーカップそのものが、つまり個物が現前しているように見える。現前するもののなかに個物が含まれないということは、素朴な直観に反しているように思われるのである。

だが、現前するもののなかに個物が含まれないということは、直観に反する以上の問題を生じさせる。ドレツキの表象説においては、現前するものはさまざまな性質である。しかし、一人称的な観点から経験を捉えたとき、それがさまざまな性質のみの現前によって成立しているのであれば、そのような経験に

よって個別的な物理的対象<sup>37</sup>の概念が利用可能になるというのがどのようにしてか、ということが謎となるのではないだろうか。つまり、ドレツキの表象説の枠組みでは、経験の説明的役割が果たされなくなってしまうのではないだろうか。

しかしながら、個物という概念を、なんらかの仕方では性質に関する概念に還元することが可能かもしれない。たとえば、個物を性質の束と考えるのであれば、ドレツキの表象説においては性質こそが現前するものに他ならないがゆえに、個物の概念が経験によって利用可能になることに問題はないであろう。それゆえ確かに、経験の説明的役割を踏まえても、テーゼ A から、ドレツキの表象説の枠組みでは個物という概念を認められない、ということは帰結しない。だがそれでも、経験の説明的役割は、ドレツキの表象説に対して、個物の概念に関する制約を与える。つまり、経験の説明的役割は、ドレツキの表象説を採用する論者に対して、個物の概念の性質に関する概念による定義を要求するのである。

だが、個物の概念が、性質に関する概念によって定義できるかどうかは議論の余地があるし、もしなんらかの定義が可能だとしても、個物に関してそのような還元的定義を採用することによる、形而上学的な含意がどのようなものであるかについての検討も必要だろう<sup>38</sup>。それらのことを鑑みると、経験の説明的役割がドレツキの表象説に課す重荷は、それほど軽いものではないように思われるのである。

ただし、ここで経験の説明的役割そのものに対する反論が可能かもしれない。たとえば、「個別的な物理的対象やその観察可能な特性という概念は、一人称的な意味での経験によって利用可能になるものではなく、私たちが生得的に所有しているものだ」というタイプの批判が想定できる。しかし、そのような批判は、私たちがそのような概念を持つために必要な能力を生得的に所有しているのみならず、そのような概念そのものを生得的に所有している、という強い主張にコミットする必要がある。そして、そのような主張は、経験の説明的役割よりも疑わしく、正当化の重荷を課されるべきものであろう。それゆえ、私は、批判者による「私たちは、個別的な物理的対象やその観察可能な特性という概念そのものを生得的に所有している」という主張に対する正当化が為されるま

では、経験の説明的役割を妥当なもののみなしてよいと考えている。

### 3.2 経験の認識論的役割からの議論

次に、テーゼ B と経験の認識論的役割の原理との整合性について考察しよう。テーゼ B によると、ドレツキの表象説の枠組みでは、現前するもののあり方と世界のあり方が別様である可能性が許容されているということになる。その可能性のなかには、現前するもののあり方と世界のあり方が通時的に完全な仕方と異なるという幻覚的事態<sup>39</sup>も含まれるであろう<sup>40</sup>。確かに、私たちはさまざまな仕方と、世界のあり方と現前するもののあり方が通時的に完全な仕方と異なっている事態を描き出すことができる。たとえば、桶の中の脳はその一例である<sup>41</sup>。だが、そのような事態が成立している可能性を認めることは、経験の認識論的役割と適合しないのではないだろうか。

その理由は以下のようなものである。つまり、そのような可能性が排除できない限り、現前するもののあり方から世界のあり方を決定することができなくなる。そして、もしそうだとすれば、現前するもののあり方によって世界のあり方についての知識を得ている、とは言えなくなってしまうだろう。

ここでは、二つの応答が可能であるように思われる。つまり、テーゼ B を改定するか、経験の認識論的役割を捨てるかのどちらかである。そして私は、どちらの選択肢を選ぶかについては、知識に関して、ある理論的直観を持っているかどうかによって依存すると考える。そのことについて詳しく説明していこう。

ここで問題となるのは、直示的要素を含む知識(「このリンゴは赤い」など)に関して一人称的な直観を持っているかどうかである。その直観とは、「ある主体の直示的要素を含む信念について、その主体に対する現前は(通時的な現前の整合性を考慮に入れたうえで)そのような信念に知識という資格を与えるのに十分である」というものである<sup>42,43</sup>。

もしも一人称的な直観を持つのであれば、経験の認識論的役割は捨てられないので、テーゼ B の改定を選ぶことになるだろう。経験の認識論的役割を保持してテーゼ B を改定するのであれば、完全な幻覚の場合には実は何も現前していないと考えるか、あるいは知覚経験の場合に現前するものと、完全な幻覚経



験の場合に現前するもの間にレベルの差異を認め、知覚経験の場合に現前するものだけが資格付与のために効力を持つ、と考えることになると思われる。前者のように考えるのであれば、「世界のあり方と、経験の現象的特徴のあり方は一致する」と述べる可能性が開ける。後者のように考える場合には、「知覚経験における現象的特徴と完全に同じ現象的特徴を持つような幻覚経験」がありうることを否定することによって、経験の認識論的役割を守ることができるようになる。

また、一人称的な直観を持たないのであれば、経験の認識論的役割を捨て、現前するもののあり方のみによって直示的要素を含む知識が獲得されるわけではない、ということを受け入れることができるだろう。その場合には、たとえば、現前するもののあり方によって獲得されるものは直示的要素を含む信念にすぎず、それが知識という資格を持つかどうかは、現前するもののあり方ではなく別の要素に依存する、という立場をとることができるだろう。

以上のことから帰結するのは、経験の認識論的役割を踏まえると、知識について一人称的な直観を持っている場合には、ドレツキの表象説を採用することができないということである。だが、これをドレツキの表象説が孕む困難とみるかどうかは、知識について一人称的な直観を持っているかどうかにかかっている。そして、ドレツキ自身は、一人称的な直観を持っていないと思われるがゆえに、ここに困難を感じないであろう<sup>44</sup>。だがそれでも、経験の認識論的役割がある程度のもっともらしさを持つので、経験の認識論的役割がドレツキの表象説と両立しないということは、ドレツキの表象説のひとつの短所とみなすことができるだろう。

### 3.3 三章のまとめ

本章の議論によって、現象的特徴に対する二つの役割を踏まえると、二つの重荷がドレツキの表象説を採用することに伴うということが明らかになった。ひとつは、個別的な物理的対象の概念、つまり個物の概念を、性質に関する概念によって定義しなければならない、というものである(3.1)。もうひとつは、経験の認識論的役割を認めることができない、というものである(3.2)。

では結局、ドレッキの表象説は、経験の現象的特徴の三人称的な枠組みへの位置づけに成功していると言えるのであろうか。私が提示した二つ目の重荷は、ドレッキの表象説が解決すべき問題を示していると言えるだろう。それゆえ、ドレッキの表象説が成功しているかどうかは、その問題がドレッキの表象説の枠組みでうまく解決できるかどうかにかかっている。その検証は今後の課題として残されているが、私はその解決は非常に困難であると考えている。また、知識について一人称的な直観を持つ論者にとっては、二つ目の重荷のゆえに、ドレッキの表象説は成功していないと結論付けざるをえない。そして、私自身は知識についてその直観を持っているがゆえに、ドレッキの表象説は成功していないと考えている。ただし、知識についてその直観を持たないのであれば、二つ目の重荷は、ドレッキの表象説の障害になるようなものではない。

#### 4 おわりに

経験の現象的特徴を三人称的な枠組みに位置づけるという試みにおいては、現前するものをどのように特徴づけるかということが重要になる。本稿で私は、現前するものの役割について規定する「経験の説明的役割」と「経験の認識論的役割」という二つの原理を、経験の現象的特徴の三人称的な位置づけの評価基準として提示した。そして、ドレッキの表象説に対してその基準を実際に適用し、ドレッキの表象説が二つの重荷を抱えているということを明らかにした。

最後に、今後の課題を確認することで本稿を閉じることにしたい。私は、ドレッキの表象説による経験の現象的特徴の分析にある程度まで共感しながらも、知識に関する一人称的な直観のゆえに、それを採用することができなかった。まだ詳しく検討したわけではないが、ことによると、ドレッキの表象説が抱える二つの重荷は、表象説一般が抱える重荷であるかもしれない。というのも、私が三章で提示した二つのテーゼは、多くの表象説が持つ特徴であるように見えるからである。それゆえ、私の今後の課題は、表象説の枠組みに囚われることなく、経験の説明的役割の原理と経験の認識論的役割の原理に適合するような、経験の現象的特徴を三人称的な枠組みに位置づけるための理論を探究していくことである。

注

- <sup>1</sup> 現代の知覚の哲学では、知覚のモダリティのうち視覚をモデルにして議論を進めていく傾向がある。しかし、私自身は他の知覚モダリティを視覚と同様の枠組みで扱うことに関して楽観的に考えているので、知覚経験一般を議論の対象とする。また、私が「経験」という語を用いるときには、その経験が真正な知覚であるか錯覚であるか幻覚であるかに関して中立であることを意図している。ただし、知覚的な経験以外のものを意味するわけではない(もしそのようなものがあるとしても、思考の経験などは除外されている)。
- <sup>2</sup> 私は、心的状態を、脳状態や脳活動にスーパーヴィーンするものに限定せずに議論を進めていくことにする。それはつまり、外在的な対象を本質的な構成要素として含むような心的状態の可能性を認めるということである。
- <sup>3</sup> 「□」は引用者による注釈を意味する。以降の引用文についても同様である。
- <sup>4</sup> この定式化は(Siegel 2006)による。(Fish 2010)も類似の定式化を与えている。私を知る限りにおいて、このタイプの定式化は(Nagel 1979)が最初である。
- <sup>5</sup> 私は、経験の現象的特徴について、経験それ自体の特徴と考えるか、現前の特徴と考えるかは排他的であると考えている(この点に同意しない論者もいるだろうが)し、経験それ自体の特徴によって経験の現象的特徴を説明することはできないと考えている。だが、経験それ自体の特徴という概念を、経験の現象的特徴を説明する理論に組み込むことは可能である。たとえばFishは、経験それ自体の特徴を個別化するものとみなし、現前の特徴を経験の特徴を実質的に決定するものとみなすという仕方、それらの両方を彼の知覚理論のうちに組み込んでいる(Fish 2009, pp.5-16)。ただし、その場合にも、経験の現象的特徴を実質的に決定しているのは現前の特徴であるということに変わりはない。
- <sup>6</sup> 現前という概念についてはValbergの分析が参考になる。彼によると、対象は現前することによって直接的に利用可能になるのであり、対象が直接的に利用可能であるということの内実は、そのものに注目すること(Focusing on)や、そのものを指示的に指示(demonstrative reference)することができるということであるという(Valberg 1992, pp. 18-21)。本稿では詳しく扱わないが、現前のそのような機能的側面は、経験の現象的特徴を分析する理論が考察すべき重要なポイントであるだろう。
- <sup>7</sup> 経験に関する探究の出発点として一人称的な観点と三人称的な観点のどちらを採用するかが、議論の展開に差異を生むかもしれない。もし経験を三人称的に特徴づけるのであれば、経験は、外界からのある種の因果的作用によって生じた脳状態や脳活動にスーパーヴィーンする(あるいは、外界からのある種の因果的作用によって脳状態や脳活動が生じるということ自体にスーパーヴィーンする)なんらかの心的状態や心的活動などとして把握されるだろう。その一方で、経験を一人称的に特徴づけるのであれば、「何かが現前すること」として把握されるであろう。これらの特徴づけは、互いに排他的であるわけではないにせよ(ある主体がある脳状態にあることと、その主体に何かが現前することは同一でありうる)、関連性を見出すことが難しいものである。本稿では、基本的に「経験」という語を中立的に(つまり、二つの特徴づけの選言として)用いる。そして、観点を明白にする必要がある場合には、それを明記することにする。
- <sup>8</sup> もし、経験の現象的特徴が三人称的に分析し得ないようなものであるならば、科学的

探究は三人称的であらざるを得ないがゆえに、経験の現象的特徴は科学的探究の領域に含まれないことになる。

<sup>9</sup> 主に、(Dretske 1995)や(Dretske 2003)など。

<sup>10</sup> キャンベルの著作のなかには、二つの異なる「経験の説明的役割」を見出すことができる。一つは、概念形成に関する役割であり、(Campbell 2002b)で主題的に扱われている、もう一つは、「あれ」などの直示語の指示に関する役割であり、(Campbell 2002a)で主題的に扱われている。ここでは、概念形成に関する経験の説明的役割に焦点を当てたい。

<sup>11</sup> (Campbell 2002b, p.128)

<sup>12</sup> 経験の説明的役割における「経験」を一人称的に解釈することの妥当性は、それを三人称的に解釈した場合にはその原理の意義が失われる、ということから明らかである。その理由を述べよう。「経験」を純粋に三人称的に解釈する場合には、それを世界(個別的な物理的対象やその観察可能な特性はそこに含まれる)と個人とのなんらかの因果関係によって成立するものとみなすことになる。だとすると、経験の説明的役割の内実は、「個別的な物理的対象やその観察可能な特性の概念が利用可能であるためには、そのような物理的対象や特性と適切な因果関係を取り結んでいなければならない」というものとなる。もしこれが経験の説明的役割の内実だとすると、この原理が極めて妥当であり、それに反対する論者を実際に見つけるのが困難であるがゆえに、わざわざその原理を述べ立てる理由を見出せなくなってしまうだろう。

<sup>13</sup> 私が思うに、心理学的意識や接近的意識(「心理学的意識」という概念は(Chalmers 1996)を参考にしている、「接近的意識」という概念は(Block 1995)を参考にしている)と区別されるような現象的意識を認める立場は、経験の現象的特徴をエピソードメンタルなもののみならず立場にコミットせざるを得ないのではないだろうか。また、私には、意識概念における上のような区別を認めたいうえで、現象的意識というものは存在しないという主張は理解できない。私自身は、意識という概念の上のような区別を認めるべきではないと考えている。

<sup>14</sup> 以降の議論では、経験の説明的役割の原理についても経験の認識論的役割の原理についても、「経験」を一人称的なものとして捉えるということは前提として話を進めていく。

<sup>15</sup> (Fish 2010, pp.65-82) ちなみに、Fish は主に知覚経験一般ではなく視覚経験について論じているが、注1で述べた理由から、その点については以後問題にしないことにする。

<sup>16</sup> (Fish 2010, p.67)

<sup>17</sup> 経験の表象内容のより詳細な特徴づけは、論者によってさまざまに異なる。たとえば、それを概念的なものとして捉える論者もいる(その場合、表象内容は命題と類比的に捉えられる)し、非概念的なものとして捉える論者もいる。また、表象内容を外在的なものとして捉える論者もいるし、内在的なものとして捉える論者もいる。ドレツキ自身は、経験の表象内容を非概念的かつ外在的なものとして捉えている(Dretske 2003)。

<sup>18</sup> スーパーヴィーニエンス関係には理論的に異なるいくつかの種類があるが、本稿の文脈においては複雑な定式化によってそれを区別する必要はない。それゆえ、ここでは「経験の表象内容が変化することなしに、経験の現象的側面が変化することはない」と考えておけばよい。

<sup>19</sup> (前田 2005 )や(Siegel 2005)などはこの定式化を用いている。

<sup>20</sup> 表象説の定式化において、フィッシュは表象内容と現象的特徴の依存関係を逆転させ

るといふ間違いを犯している。フィッシュによると、表象説は「表象内容における変化は現象学における変化を必要とする」(Fish 2010, p.67)というテーゼを支持する立場だといふ。しかし、このテーゼは、表象内容の変化なしに現象的特徴が変化する可能性を排除しない。つまり、そのテーゼは、スーパーヴィーニエンス関係として読み替えると、「経験の表象内容は経験の現象的特徴にスーパーヴィーンする」というテーゼに翻訳されてしまうのである。このテーゼを一般的な表象説のテーゼと比べたとき、依存関係が逆転しているのは明白である。

<sup>21</sup> (Dretske 2003, p.67)

<sup>22</sup> (Dretske 1995)や(Dretske 2003)を参照した。

<sup>23</sup> (Dretske 1995, p.2 邦訳 p.2)

<sup>24</sup> ドレツキにおいて、「表示」と「表象」は異なる概念であるということには注意が必要である。SがPを表示するためには、SはPについての情報を担っている(私たちが認識できる仕方)だけでよく、Pについての情報を担う機能を持っている必要はない。その一方で、SがPを表象するためには、SはPについての情報を担っているだけではなく、Pについての情報を担う機能を持っている必要がある。たとえば、シーソーはその両端に乗っているもののどちらが重いか(軽いか)を表示するが、それを表象するわけではない。その一方で、天秤は、その両端に乗っているものの重さについての情報を担う機能を持つがゆえに、それらのどちらが重いか(軽いか)を表示するだけではなく、表象もするのである。

<sup>25</sup> (Dretske 1999)を参照した。

<sup>26</sup> 私は、経験の媒体を脳状態だと考えることにおいて、多くの表象主義者が同意するだろうと考えている。しかし、すべての表象主義者がそうであるというわけではない。たとえば前田は、経験を無媒体的な表象として捉えるべきだと論じている(前田 2005)。

<sup>27</sup> (Dretske 1995, pp.6-8 邦訳 pp.7-10)

<sup>28</sup> (Dretske 1995, p.18 邦訳 p.21)

<sup>29</sup> (Dretske 2003, p.67)

<sup>30</sup> ここに、説明のギャップを見て取ることができるかもしれない。つまり、脳状態の表象内容は事物によって例化されているものとして表象される性質である、ということだけでは、どうして表象される性質が経験の現象的特徴の構成要素になるのかということは説明されていないのではないだろうか。ここでの問題は、性質を表象する仕方は多様にあり、たとえば信念において表象される性質が現象的特徴の構成要素にならないにもかかわらず、どうして経験において表象される性質だけが現象的特徴の構成要素となるのだろうかということである。この問題についての詳しい考察は、(前田 2005)で展開されている。私は、この問題は重要であると考えているが、本稿で詳しく論じる余裕はないので、この問題がドレツキの表象説にとって満足のいく形で解決されると仮定して議論を進めていくことにする。

<sup>31</sup> (Dretske 2003, p.69)

<sup>32</sup> (Dretske 2003, p.69)

<sup>33</sup> ここで用語法について明確にしておこう。上の引用文でドレツキが"objects"(「対象」)によって表現しているものに対して、私は「個物」という語を割り当てる。ただし、引用文ではそのまま「対象」と訳してある。私自身は「対象」を、何らかの行為や作用の向けられるものを意味する語として用いる。ドレツキの用語法においては、性質は対象ではありえないが、私の用語法では、性質もなんらかの意味での対象であろう

る。

- <sup>34</sup> このことは、単にどの個物が現象的特徴を構成しているのかが一人称的観点から判断できないというだけでなく、文字通り、現象的特徴を構成するもののなかに個物が存在しないということを意味している。
- <sup>35</sup> (Dretske 1995, pp.24-25 邦訳 pp.28-29)を参照した。また、因果理論についてのより詳細な議論は、(Dretske 1981, pp.156-168)で為されている。
- <sup>36</sup> 「ある個物と主体の間に知覚を成立させるような因果連関が存在するときに、その因果連関の終端にある脳状態が、実際にその個物が例化しているような性質を表象している」という意味で、「個物を表象している」(具体的には、「コーヒーカップを表象している」など)と言うことは可能であるし、実際にドレツキもそのような語り方を用いることがある。この語り方においては、「個物を表象する」ということと「個物を知覚する」ということは同義であるかもしれない。しかし、その意味で個物を表象しているということと、表象内容の構成要素のうちに個物が含まれるということは別のことである(先に述べたように、ドレツキの理論においてそこに個物は含まれない。つまり、コーヒーカップそのものが表象内容の構成要素になることはない)。「表象されるもの」を「表象内容を構成するもの」という意味で解釈するのであれば、ドレツキの理論において個物は表象されないことになる。私は、この後者の意味で「表象する」という語を用いている。
- <sup>37</sup> ここでは、「個別の物理的対象」を「個物」を同義とみなしている。
- <sup>38</sup> たとえば、「例化」という概念が消滅してしまうことによって、幻覚の概念がうまく捉えられなくなってしまふ、という問題が生じるかもしれない。この論点は、(前田 2007, 注 14)を参考にした。
- <sup>39</sup> ここでは、「通時的に完全に異なる幻覚的事態」ということで、いかなる時点においても一人称的な観点から、その経験が真正な知覚ではなく幻覚であると判断できない事態を意味している。単にある時点においてのみ完全な幻覚経験においては、別の時点における現前を参照することによって、その時点における経験が幻覚的であると知り、さらに、その時点において成立していた事実について知ることができる可能性がある。その場合には、現前の認識論的な力は、全体論的な制限をうけるとはいえ、許容されてしまうことになる。それゆえ、「通時的に完全に」という要件は、以降の議論にとって不可欠なものである。
- <sup>40</sup> このような懐疑論的可能性を認めるべきであるかどうかは議論の余地があるだろう。だがここでは、そのような可能性を妨げる妥当な制約がドレツキの表象説の内部には見出せないということを前提して議論を進めていく。
- <sup>41</sup> 桶の中の脳については(Putnam 1981)を参照した。
- <sup>42</sup> ここで強調したいことは、直示的知識についての一人称的な直観は、直示的知識についての内在主義を含意しないということである。内在主義は、ある主体の信念に知識という資格を与えるためには正当化が必要であり、主体がその正当化にアクセス可能である必要がある、と考える立場である。直示的知識についての一人称的な直観は、そのような正当化の必要性や、その正当化へのアクセス可能性の必要性を含意しないのである。
- <sup>43</sup> ここで以下のような疑問が浮かぶかもしれない。つまり、一人称的な直観を持つ論者は実際に存在するのだろうか。また、その直観と適合するような経験的知識の理論は存在するのだろうか。議論の余地はあるが、(Mcdowell 1982)を見る限りでは、マクダ

ウェルはその直観を持っていたと言える私は考えている。また、より詳しい考察が必要ではあるが、(Brewer 1999)で提示されている経験的知識の理論は、その直観と適合するように思われる。

<sup>44</sup> ドレツキの知識論については、(Dretske 1981)を参照した。

## 文献表

- Block, N. (1995), "On a Confusion about a Function of Consciousness", *Behavioral and brain Science*, 18, pp.227-247.
- Brewer, B. (1999), *Perception and Reason*, Oxford University Press.
- Campbell, J. (2002a), *Reference and Consciousness*, Oxford University Press.
- Campbell, J. (2002b), "Berkeley's Puzzle", in Tamar Szabo Gendler and John O'Leary Hawthorne (eds.), *Conceivability and Possibility*. Oxford University Press, pp.127-143.
- Campbell, J. (2005), "Precis of *Reference and Consciousness*", *Philosophical Studies*, 126, pp.103-114.
- Campbell, J. (2009), "Consciousness and Reference", in Brian McLaughlin & Ansgar Beckermann (eds.), *Oxford Handbook of Philosophy of Mind*. Oxford University Press, pp.648-662.
- Chalmers, D.J. (1996), *The Conscious Mind*, Oxford University Press. (邦訳：『意識する心—脳と精神の根本理論を求めて』、林一訳、2001、白揚社)
- Dretske, F. (1981), *Knowledge and the Flow of Information*, MIT Press.
- Dretske, F. (1993), "Conscious Experience", *Mind*, 102, no.406, pp.263-283.
- Dretske, F. (1995), *Naturalizing the Mind*, The MIT Press. (邦訳：『心を自然化する』、鈴木貴之訳、2007、勁草書房)
- Dretske, F. (1999), "Perception", in *The Cambridge Dictionary of Philosophy (second edition)*, Cambridge University Press.
- Dretske, F. (2003), "Experience as Representation", *Philosophical Issues*, 13, pp.67-82.
- Fish, W. (2009), *Perception, Hallucination and Illusion*, Oxford University Press.
- Fish, W. (2010), *Philosophy of Perception*, Routledge.
- 前田高弘(2003) 「我々は何を直接見ているのか?」『科学哲学』,36-1, pp.29-42.
- 前田高弘(2005) 「表象としての経験」『科学哲学』,38-2, pp.123-138.
- 前田高弘(2007) 「知覚経験の対象としての性質」『科学哲学』,40-2, pp.41-56.
- McDowell, J. (1982), "Criteria, Defeasibility, and Knowledge", *Proceedings of the British Academy* 68, pp.455-79.
- Nagel, T. (1979), "What Is It Like to Be a Bat?", *Mortal Questions*, Cambridge University Press, pp.165-180. (邦訳：『コウモリであるとはどのようなことか』、永井均訳、1989、勁草書房)
- Putnam, H. (1981), *Reason, Truth and History*, Cambridge University Press. (邦訳：『理性・真理・歴史』、野本和幸他訳、1994、法政大学出版会)
- Siegel, S. (2005), "The Contents of Perception", *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, <http://plato.stanford.edu/entries/perception-contents/>
- Valberg, J. (1992), "The Puzzle of Experience", in *The Contents of Experience*, Edited by Crane,

T. Cambridge University Press, pp.18-47.

(にいかわ たくや／北海道大学)